

# 長岡宮第二次内裏「東宮」<sup>だいにり ひがしみや</sup> 正殿地区<sup>せいでん ひがしわきでん</sup> 東脇殿の調査

所 在 京都府向日市<sup>かいてり ひがしひと</sup>鶏冠井町東井戸51-4

調査期間 2009（平成 21）年 6 月 23 日～8 月 20 日予定

調査所管 向日市教育委員会

調査機関 財団法人向日市埋蔵文化財センター（担当 梅本康広）

## 1 はじめに

**長岡京の内裏** 天皇の居所である内裏は長岡京においては 10 年の間に二度の移転が行われ、3 箇所<sup>3</sup>に造営されていました。文献史料によれば桓武天皇は延暦 8（789）年 2 月 27 日、「西宮」より「東宮」に遷御し（『続日本紀』）、延暦 12（793）年 1 月 21 日、宮を解体するために「東院」へ遷御した（『日本紀略』）と伝えられています。現在までに発掘調査で確認されている内裏は「東宮」と「東院」であり、「西宮」の所在についてはまだ確定していません。

**「東宮」の調査成果** 第二次内裏である「東宮」は昭和 41（1966）年に発見され、これまでに 32 回に及ぶ調査が行われています。築地回廊<sup>つじかいろ</sup>で囲まれた内郭は一辺約 159m 四方の規模を有します。平城宮では東西 178m、南北 187m、後期難波宮が東西 179m（南北値不明）、平安宮では東西約 170m、南北 280m ですから、他の都城と比べると長岡宮「東宮」は正方形を呈してやや規模が小さかったとみられます。内部からは正殿をはじめ檜皮もしくは板葺きの掘立柱建物が 8 棟、掘立柱塀 1 条などが確認されています。平安宮「紫宸殿」<sup>ししんでん</sup>に相当する正殿は身舎の規模が桁行 9 間、梁間 3 間で、四面には廂を設けますが各面の隅を欠く構造となっています。正殿の北側には天皇の後宮が展開していたと考えられておりそこで確認された 5 棟の建物配置には桓武天皇が即位後 2 年半を居所とした平城宮内裏から引き継ぎ平安宮内裏へとつながる新旧ふたつの要素が備わっており、内裏構造の漸移的変化を窺うことができます。

**今回の調査** 調査地は標高約 22m の段丘低位面に立地し、正殿の南東約 20m 付近に位置します。後期難波宮や桓武朝の平城宮内裏では正殿地区を区画する掘立柱塀（東垣）が通過し、また、平安宮内裏の復原では東第二脇殿である「春興殿」<sup>しゅんこうでん</sup>が存在する場所に相当します。このため調査では正殿地区を区画する塀や脇殿の確認に期待が寄せられました。

## 2 調査の成果

**基本層序** 調査地に遺存する旧来の堆積土の基本構成は盛土以下 6 層に区分されます。第 1 層は現代の耕作土、第 2 層は近世遺物包含層、第 3 層は平安時代整地層、第 4 層は長岡京期内裏造宮関連堆積層、第 5 層弥生時代遺物包含層、第 6 層段丘構成層になります。

**検出遺構** 確認された遺構は内裏関連遺構として東脇殿、南面築地回廊などがありますが、江戸時代の濠状遺構 S X44、土壙 S K32、土壙状遺構 S X21・31・35、くぼ地 S X36・40 などによって改変が著しい状況です。ここでは内裏関連遺構を中心に説明を行います。

〔東脇殿 S B47203〕 基壇を備えた東西棟の掘立柱建物で、その東端にあたる桁行（東西）3 間以上、梁間（南北）2 間分を確認しました。基壇<sup>きだん</sup>の出は柱心から東側へ約 2.1m（7 尺）、南側へ約 2.4m（9 尺）になります。柱掘方は一辺 1.2m 四方の規模を有しています。東妻側の棟持柱だけは東西 1.6m、南北 1.3m、深さ 0.8m あり、かなり大きくつくられています。柱間は桁行と梁間がともに 3.0m（10 尺）等間になります。北側には廂<sup>ひさし</sup>がつく可能性があります。建物の周囲には凝灰岩の縁石を敷設した外装が



(2) 後期難波宮内裏  
 大阪市文協2005  
 『難波宮址の研究』十三より

(1) 平城宮内裏

奈文研1995『平城宮跡資料館図録』より

図1 平城宮と後期難波宮の内裏の位置

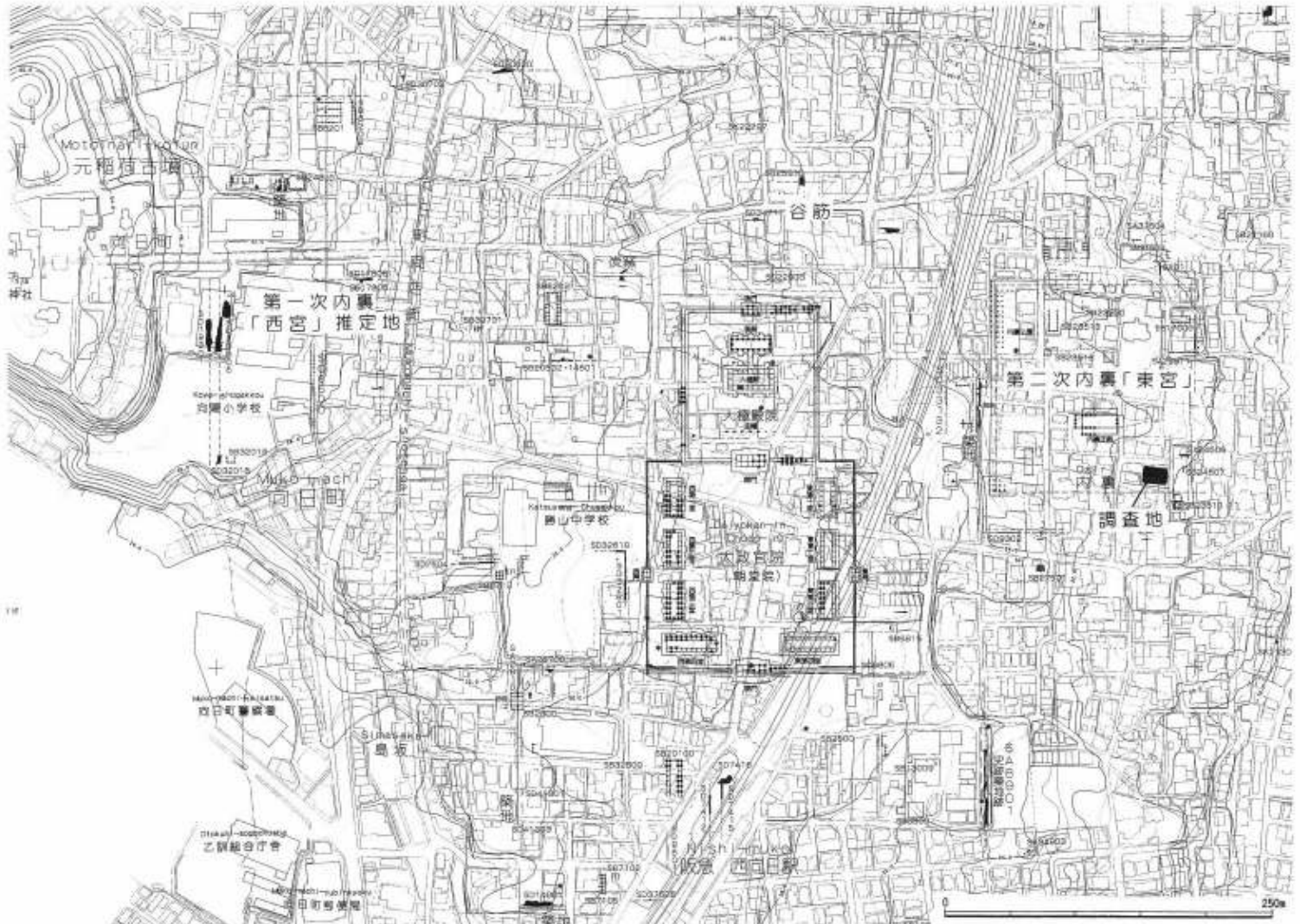


図2 長岡宮内裏の位置 (1:5000)

伴い、その抜取痕跡が溝状にめぐります。この内側には基壇の構築土が、また、外側には化粧土が施されています。柱は全て抜き取られています。その抜取穴は基壇土の上面から掘り込まれており、柱掘方とは検出面が異なります。抜取穴は掘削した土をそのままどさずに、精良な明黄褐色粘質土をもちいて埋められています。基壇縁石の抜取痕跡も同じ土で埋まっています。これらの検出面の直上にはにぶいオリーブ色の精良な粘質土が約 10～20 cmの厚みで堆積しています。遺物は少ないのですが平安時代前期の緑釉陶器皿が出土しており、その時期の整地土である可能性が考えられます。

**造営方法** 建物の構築にあたっては、南東へ勾配を持つ地形を造成して弥生時代後期の遺物包含層（内裏下層遺跡）の上に盛土（整地土）が施され、平坦な面を築いたのち柱穴が掘られています。柱を据え置き、そのまわりに裏込土が充填されて柱穴を埋め立てます。基壇外装の縁石を設置し、その内側に拳大の礫を多く含む明橙茶色礫質土の基壇構築土が約 20～30 cmの厚さで建物の下部とその周縁に施されています。柱掘方 P1 だけは裏込土に基壇土が使われています。基壇の外側へは精良な明黄褐色粘質土が施され、建物周辺の地盤を整備しています。礫もしくは瓦による舗装はなかったとみられます。なお、雨落溝については基壇縁を直接護岸とする構造になっていたかそれ自体つくられていなかった可能性があります。

**基壇の高さ** 掘立柱建物に伴う基壇であり、建物の格の高さを荘厳にあらわすために見栄えよくしつらえた程度と考えれば、縁石は一段程度でその内側に化粧土を積み足して仕上げられた極めて低い基壇に復原することができます。一方で、柱と基壇外装の抜取穴を埋め戻す土や平安時代の整地土を基壇土に由来すると見るならばかなりの高さを復原することができます。その場合、東脇殿の解体時には基壇の切り崩しは一部で平安時代前期まで基壇の高まりは残りそれをならして整地が行われたと想定されます。

〔東脇殿縁石抜取痕跡 S X 47202・06〕 脇殿基底部の外装にもちいられた凝灰岩縁石の抜取痕跡で、南側柱列の芯から約 2.5m、東側柱列から 1.7mのところには布掘りの溝が設けられています。南面抜取痕跡 S X 45702 は幅 0.8～1.3m、深さ 0.2mで抜取によって変形を受けています。しかし、底部の断面形状は箱形をしており縁石が置かれていた痕跡をとどめています。一方、東面抜取痕跡 S X 45706 は幅 0.55 m、深さ 0.2mで平面形が直線的な形状を呈しており、大きな掘り込みを設けずに抜取が行なわれていたとみられます。溝内からは凝灰岩の細片と土器の細片が少量含まれていました。

〔南面築地回廊北雨落溝 S D 47204〕 内裏南端を東西に貫流する基幹排水路を兼ねた築地回廊の雨落溝で、幅約 1.8m、深さ 0.6mの規模を有し、総延長約 20m分を検出しました。断面は箱形をしており、溝底面の高さから東へ排水していたことがわかります。埋土の上層は平安時代前期の整地土とよく似ており、その頃まで埋まりきらずに機能していた可能性があります。瓦や須恵器が多数出土しました。

〔南面築地回廊基壇縁石抜取痕跡 S X 47205〕 調査区南端で凝灰岩や瓦の細片を多数含む基壇外装の地覆石抜取痕跡を確認しました。

〔瓦落ち S X 47201〕 雨落溝から約 1 m北側で幅 1.5m、東西 6 mにわたって検出されました。南面回廊に葺かれていた瓦が廃棄されたものと思われます。軒丸瓦 1 点と多数の平丸瓦が確認されました。

### 3 調査の意義

#### ① 脇殿の存在を明らかにし、その規模と構造が判明した

東脇殿は基壇を備えた東西棟の掘立柱建物で、南側の基壇の出と同じ規模で北側に基壇縁石の抜取痕跡が確認されなかったことから、北に廂がつく建物であった可能性が高いものと思われます。内裏内で

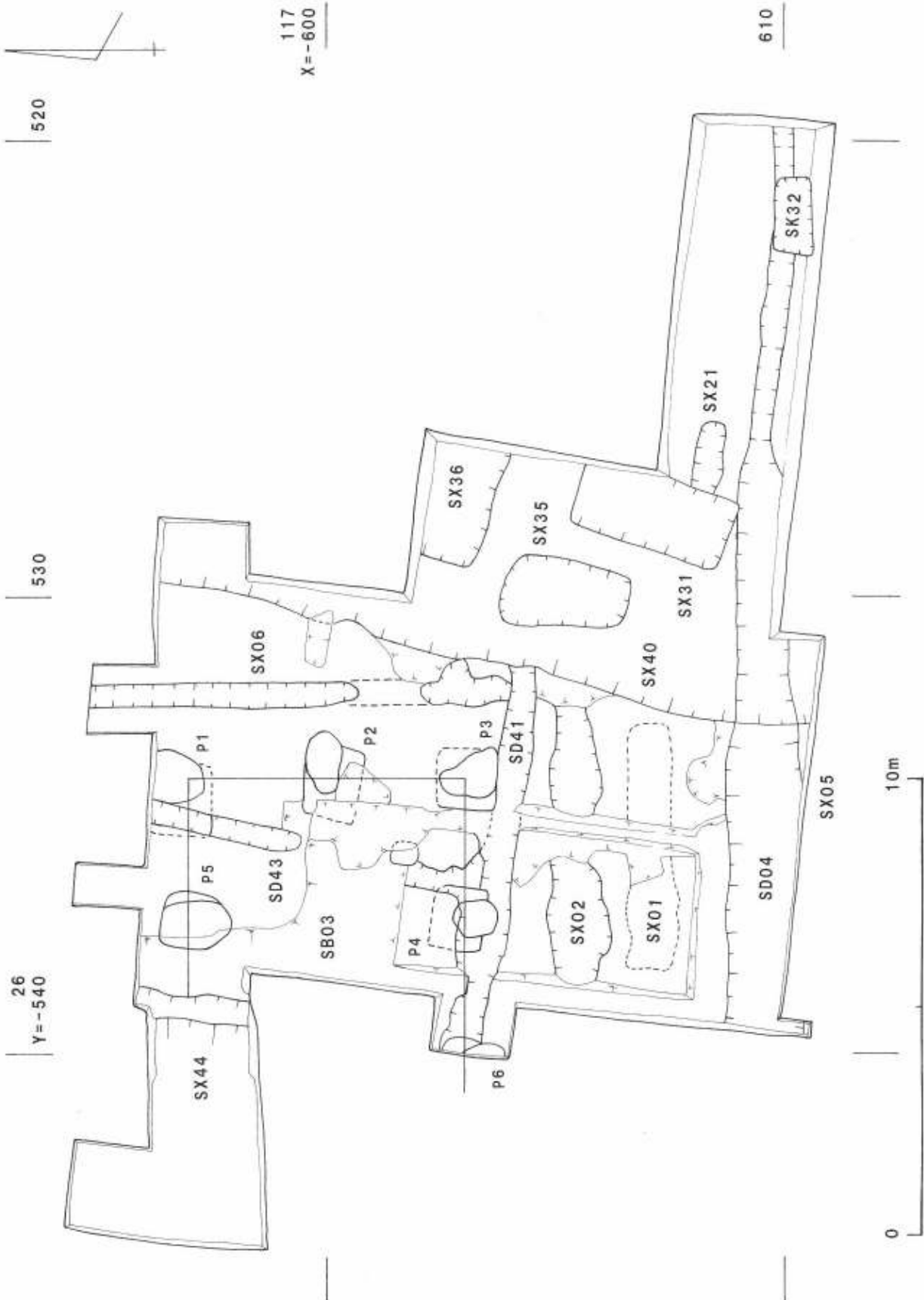


圖3 調查地遺構配置圖

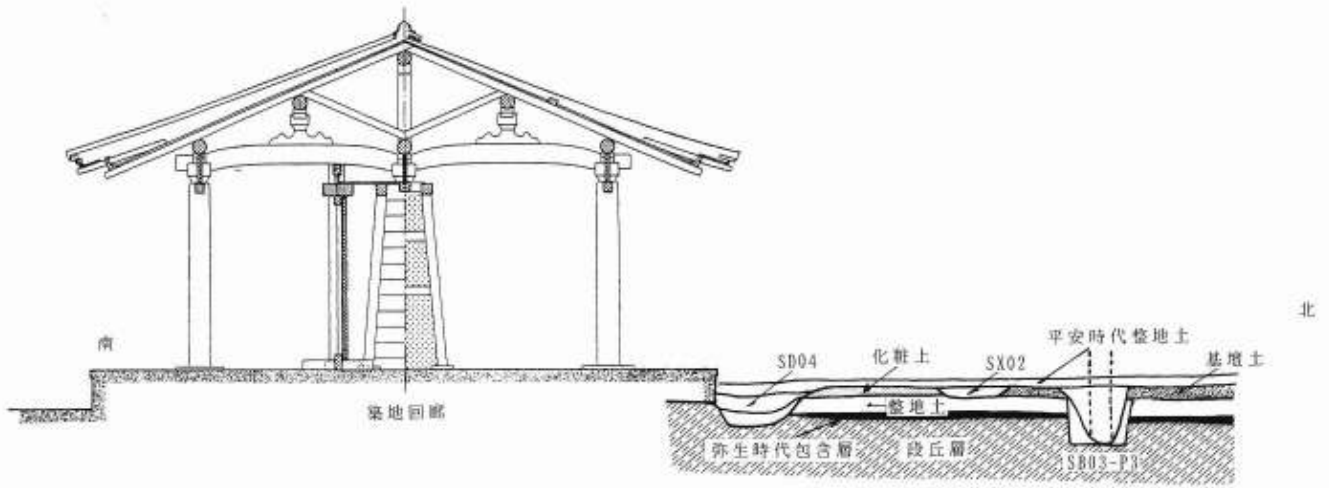


図4 調査地断面模式図

建物の復原は奈文研1963『平城宮発掘調査報告Ⅲ』を改変

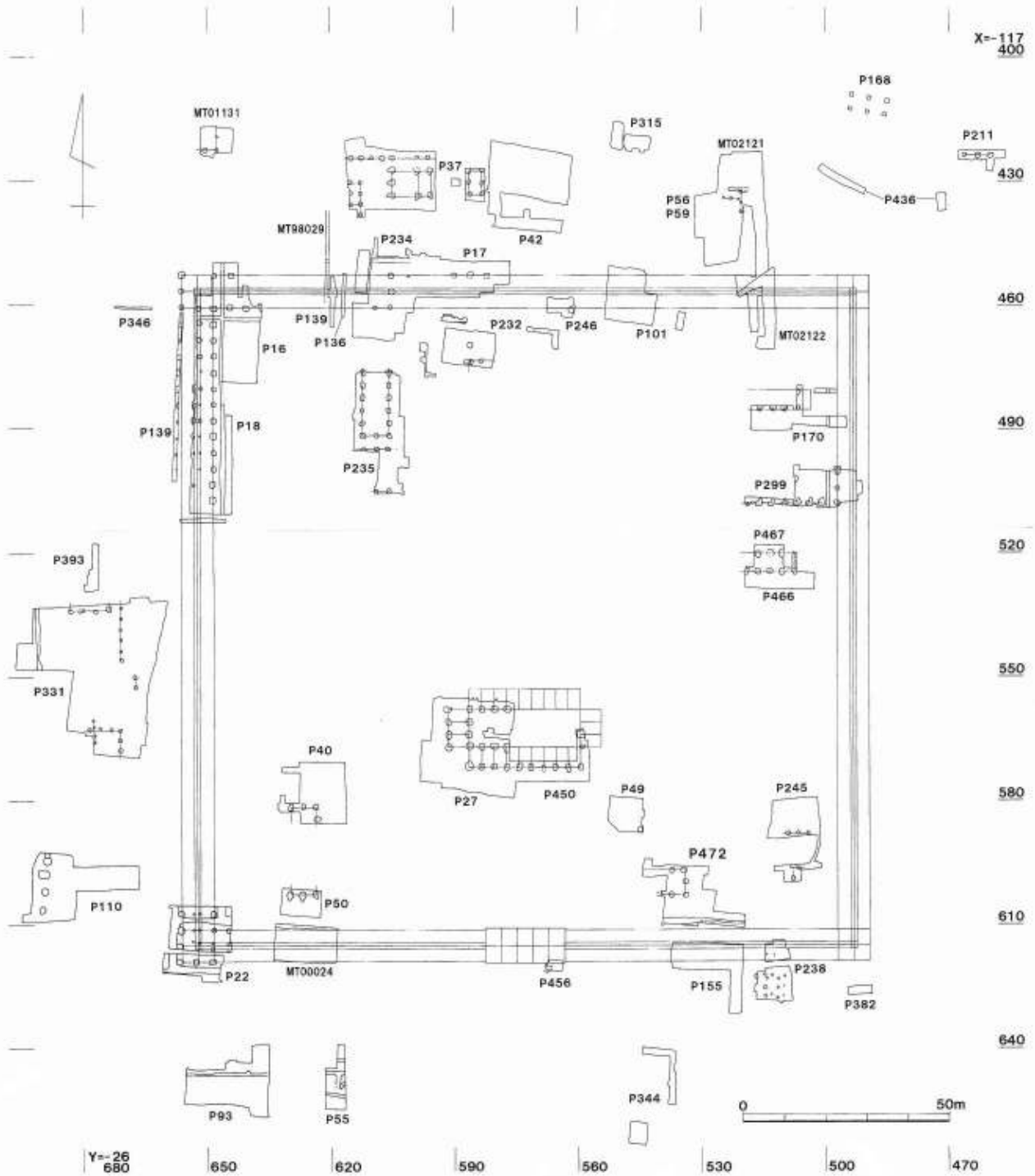


図5 第二次内裏「東宮」遺構配置図

確認された建物のなかで廂の出が判明している例として、17 尺の広廂をもつ正殿や 15 尺を有する北東の殿舎 2 棟、11 尺の北西殿舎 1 棟が知られています。このことから東脇殿については 15 尺はあったものと思われます。ところで東脇殿の身舎は桁行の規模をどのように復原することができるのでしょうか。桓武朝の平城宮内裏では南北棟の廂を持たない桁行 9 間、梁間 2 間の脇殿が知られています。長岡京東院でも南北棟の東西両面廂付の桁行 9 間建物が確認されています。平安宮内裏では宜陽殿<sup>ぎやうでん</sup>が 9 間建物、春興殿が 7 間建物であったことが知られています。これらを参考にして、長岡宮内裏の前庭部の空間配置を検討してみると東西 9 間では正殿の前方を遮る形になり、前庭部が狭くなるため 7 間までにおさめて考えるのが妥当かと思われます。以上のことから、東脇殿は桁行 7 間（約 21m）、梁間 2 間（約 6m）の身舎<sup>しんしゃ</sup>に 15 尺（4.5m）の廂がつく建物に復原することが可能です。建物の規模から想定される基壇の規模は東西 25.2m（84 尺）、南北 15.9m（53 尺）になります。

## ② 脇殿構築の技術系譜がわかった

脇殿の基礎構造に見られる構築方法は長岡京ではほかに内裏正殿でみることができます。他の都城でも同様な構築方法を採用した建物は、飛鳥浄御原宮内郭北区画南の正殿、平城宮第二次朝堂院下層朝堂建物において確認することができます。宮殿の中核施設のなかでも特に格の高い建物に限られた工法と考えられます。平安宮になると宮殿内はほとんどが礎石建物に転換するため、伝統的な掘立柱建物による宮殿建築の最後の事例となります。

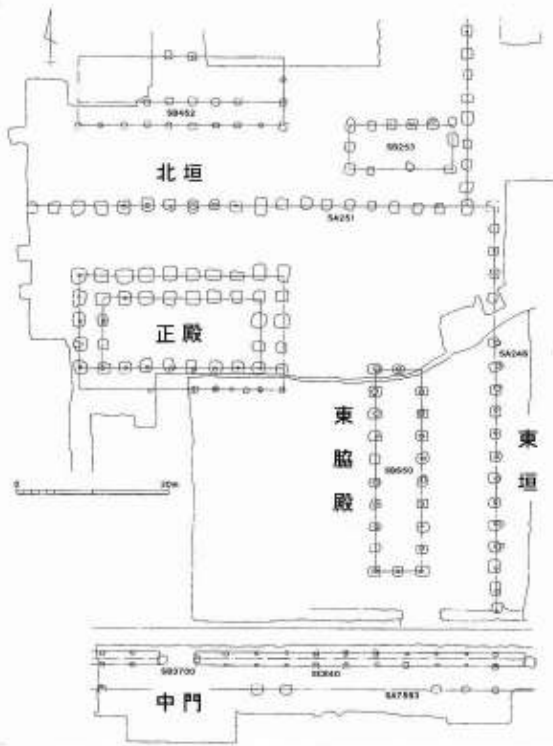
## ③ 正殿地区の建物配置が明らかになった

今回確認された脇殿の北側には桁行 9 間規模の南北棟建物が占有できる空間が十分に備わっており、さらにもう一棟存在した可能性は高いものと思われます。南面回廊に隣接して棟方位を東西とする脇殿の配置形態は正殿地区の内裏における占有スペースに規制されて、南北に 2 棟並列することができず、一方を東西に向けなければ配置できなかったために生じた状況であったと考えられます。正殿地区の脇殿は正殿を中心に左右対称の配置をとっていたと考えられ、東西各 2 棟から成る脇殿が正殿をはさんでコの字形に配置して、正殿地区を形成していたと考えられます。ところで、平城宮内裏や後期難波宮では正殿地区を掘立柱の塀によって区画しています。このような遮蔽施設は「東宮」にはつくられていなかったと考えられます。というのも、東西棟の西脇殿から西側へ約 12m の距離において宮第 40・50 次調査で確認された桁行 7 間、梁間 2 間の南北棟建物があり、両建物の間に正殿地区を区画する掘立柱建物塀の存在が見込まれましたが、宮第 40 次調査地点では想定位置にそのような遺構が確認されていないからです。平安宮内裏のように脇殿を配置させて空間が遮蔽されていたと思われます。

脇殿の配置計画については内裏正殿の身舎南端から脇殿の身舎北端まで 100 尺、内裏の中心から身舎西端まで 60 尺、南面回廊芯から身舎南端まで 40 尺の位置に設定されています。

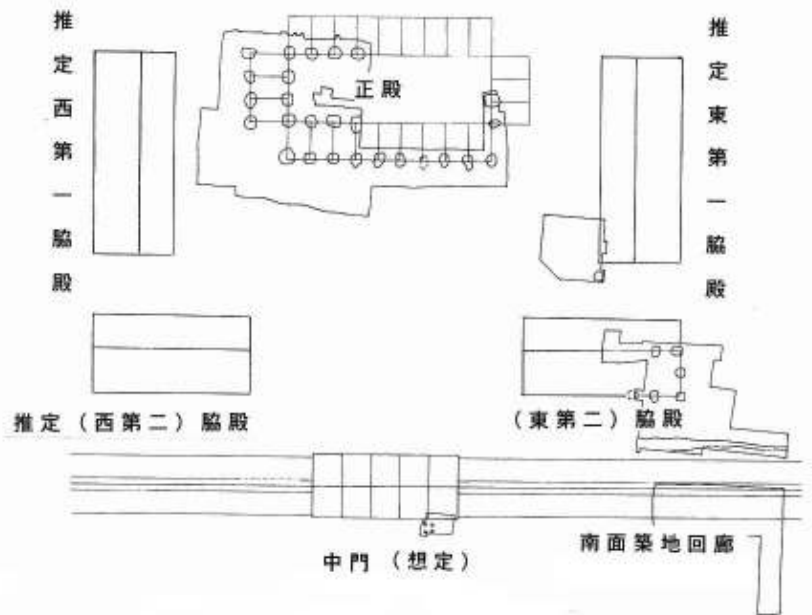
## ④ 脇殿の機能に朝堂的な要素を見いだした

平安宮の脇殿は平安時代中後期の文献史料を通じて御物や武器などをおさめた収納庫であり、その一郭に臣下の参集する場所（宜陽殿西廂の議所）が設けられていたことがわかっています。長岡宮では天皇の日常政務の場が大極殿から内裏へ移り両者が分離した配置はそのことを端的にあらわしています。今回発見された脇殿から復原される正殿地区の建物配置は、内裏での朝政が確立した当初に当たりそれが平安宮で定着する在り方へどのように推移したかを解明する糸口を有しているといえます。脇殿 4 棟の配置は朝堂院の配置に通じており、朝堂としての機能が第一義におかれた段階の形態であったと考えられます。

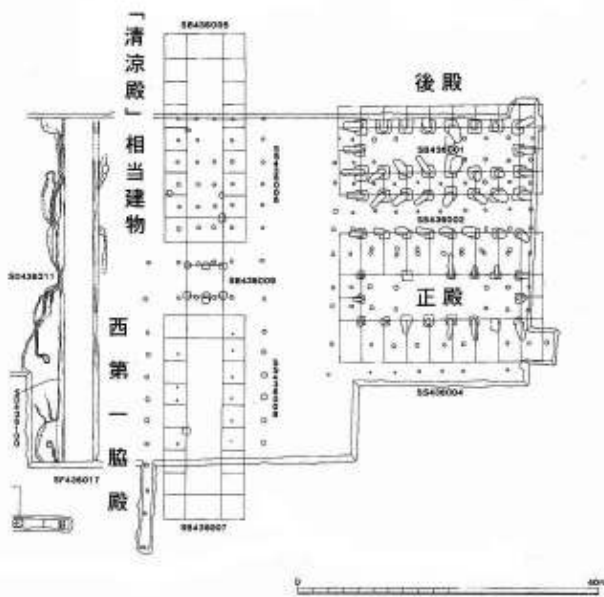


(1) 平城宮内裏 (桓武朝)

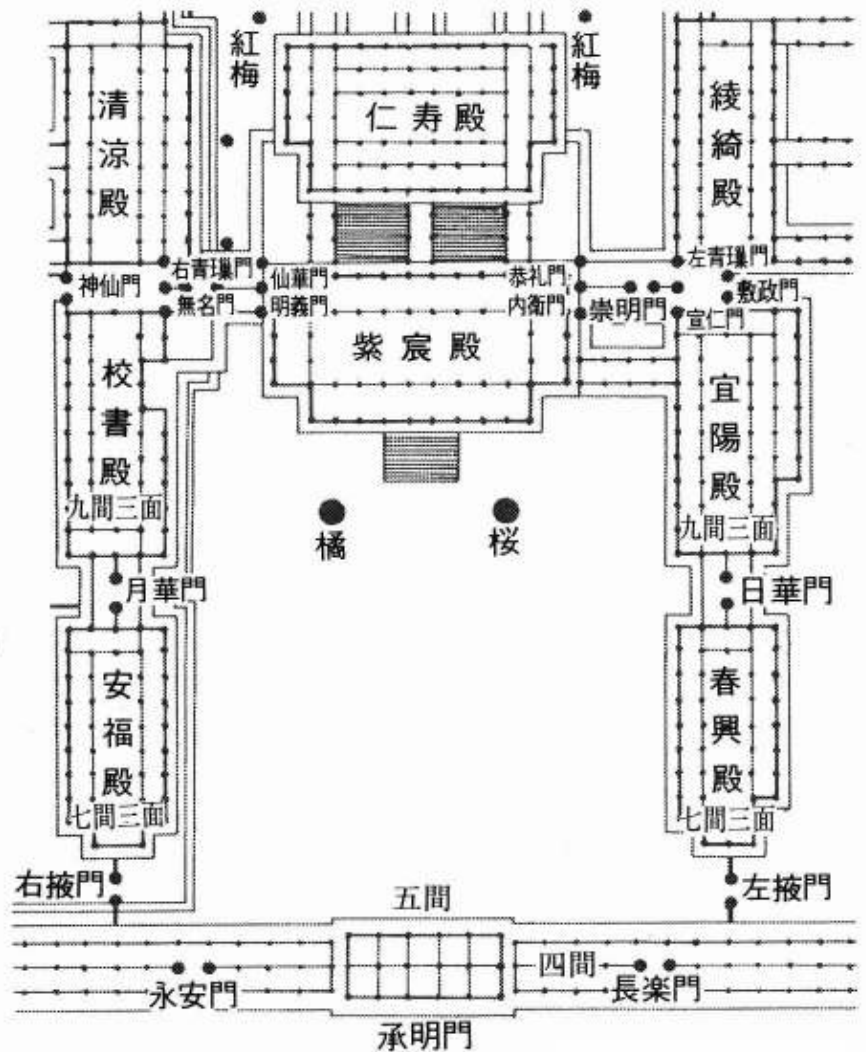
奈文研1991『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』  
をもとに作成



(2) 長岡宮第二次内裏「東宮」(復原想定)



(3) 長岡京左京「東院」



(4) 平安宮内裏

図6 脇殿の配置

古代学協会1994『平安京提要』をもとに作成

〔一〕長岡宮内裏関係史料

(一) 『続日本紀』延暦四年(七七五)正月丁酉朔(一日)条  
天皇、大極殿に御しまして、朝を受けたまふ。(中略)是の日、五位已上を内裏に宴  
して、禄を賜うこと差有り。

(二) 『続日本紀』延暦六年(七七七)三月丁亥(三日)条  
五位已上を内裏に宴す。文人を召して曲水を賦せしむ。宴訖りて、禄を賜うこと各  
差有り。

(三) 『続日本紀』延暦七年(七八八)正月甲子(十五日)条  
皇太子元服を加へたまふ。その儀、天皇吉后並に前殿に御して、大納言從二位兼皇  
太子傅藤原朝臣繼繩・中納言從三位紀朝臣船守兩人をして、手づからその冠を加  
へしめたまふ。(中略)是の日、群臣を引き、殿上に宴飲す。禄を賜うこと差有り。

(四) 『続日本紀』延暦七年(七八八)十二月甲辰(七日)条  
征東大將軍紀朝臣古佐美、辞見す。詔して、召して殿上に昇らしめたまひて、  
節刀を賜ふ。

(五) 『続日本紀』延暦八年(七八九)二月庚子(二十八日)条  
西宮より移りて、始めて東宮に御します。

(六) 『続日本紀』延暦九年(七九〇)十月丙午(十四日)条  
高年人道守臣東人を内裏に引きて見たまふ。時に年一百十二歳なり。(下略)

(七) 『類聚国史』三元日朝賀 延暦十一年(七九二)正月丁巳(一日)条  
侍臣を前殿に宴して御被を賜う。

(八) 『類聚国史』三元日朝賀 延暦十二年(七九三)正月庚辰朔(一日)条  
皇帝大極殿に御して朝賀を受く。侍臣を前殿に宴して被を賜う。

(九) 『類聚国史』天皇遷御 延暦十二年(七九三)正月庚子(二十一日)条  
東院に遷御す。宮を壞たんと欲するに縁ればなり。

〔二〕平安宮内裏賜殿関係史料

(一) 『類聚国史』三元日朝賀 天長四年(八二七)正月甲子(一日)条  
宜陽殿の廂の下に於て、親王已下侍從已上を召して、酒食を命じ、被を賜う。

(二) 『続日本後紀』承和四年(八三七)十二月辛卯(二日)条  
是の夜、盜、春興殿を開き、絹五十餘疋を偷取す。宿衛之人、見る者を得ず。

(三) 『日本三代実録』貞観十三年(八七二)六月一日丁丑条  
去る貞観八年、春興殿の甲冑七十三領を出し、造兵司に下し、修理す。事畢りて、  
是の日、運納す。

(四) 『延喜式』中務省 雷鳴条  
凡そ内舍人、雷鳴の陣に參らば、春興殿の西廂に立て。

(五) 『枕草子』第九七段 無名といふ琵琶  
前略 御前に候ふ物どもは、みな、琴、笛も、めづらしき名つきてこそあれ。琵  
琶は玄上、牧馬、井手、滑橋、無名など、また和琴なども、朽目、塩竈、具などぞ聞  
ゆる。水龍、小水龍、宇多の法師、釘打、葉二つ、何くれと、おほく聞こえしかど、  
忘れにけり。「宜陽殿一の棚に」といふ言くきは、頭中将こそしたまひしか。